



時代に翻弄された軍人歌人

山名康郎

齋藤 瀏

新
歌人群像

あなたまあをかきな一生でしたねと会
はば言ひたし父といふ男

娘の齋藤史が父・瀏を詠んだ歌である。濟南事件で出兵の責任をとられ現役の第一線を退き、二・二六事件では連座して下獄、さらに大日本歌人協会解散では張本人として歌壇史に汚名を残すなど、それこそ波乱に富んだ生涯であった。

丁稚小僧から軍人へ

瀏は明治十二（一八七九）年四月、長野県北安曇郡七貴村（現在、東筑摩郡明科町）に松本藩の武士の子として生まれた。家が貧しかったため小学校の卒業前、隣の北城村（現・白馬村）の造り酒屋に奉公に出された。陰日向のない働きぶり、抜群の学校の成績を見込まれて十二歳のとき秀才の集まる「晩翠塾」の齋藤順に預けられた。齋藤家は代々松本藩に仕える医者の家柄、やがて瀏はこの家の養子に迎えられた。

養父の順は将来は医者にして家を継がせたかったが、松本中学二年のとき瀏は「軍人になりたいので、どうか幼年学校にやっつて下さい」と懇願した。「武士の血」が軍人の道を



済南事件前後の瀧一家。左より妻・キク、史、瀧。
(中国よりの帰還記念写真か)

選ばせたのであろう。瀧は幼年学校から士官学校へと進み陸軍少尉に任官、さらに中尉に昇進し日露戦争に従軍した。その戦場から佐木信綱に手紙を出し、作歌の指導をお願いした。

「ただ強いだけが軍人でない」と諭した父の順は瀧の従軍中、五十四歳の若さで亡くなった。

一人子を君にささげてちちのみの父はさびしと言はで死にしか

夕されば酒あたたためし思ひ出に悲しみ
いまさむ火をおこしつ

瀧は戦闘中、負傷して内地に送還され、東京・渋谷の陸軍病院で療養中、松葉杖をつい

て神田小川町の信綱を訪ね門下の一人に加えてもらった。以来、軍務の傍ら作歌に精進した。「軍人が歌を詠むなど文弱だ、出世の妨げになるからやめろ」と多くの友人に忠告されたが、文武両道の信念を貫く瀧だった。

牧水の短冊売りの面倒

時代は明治から大正に移り、瀧は旭川第七師団勤務となった。のちに二・二六事件で刑死した栗原安秀、坂井直は同じ官舎の将校の息子で娘・史の幼な友達だった。大正十三(一九二四)年、参謀長として二度目の第七師団勤務。この任期中、若山牧水が訪ねて来た。「創作」の出版で印刷所に多額の借金をしたため色紙や短冊や半切などを書いて売り、資金を集めようというものだった。牧水の懇願の手紙に義侠心の強い瀧は東京時代、一度会っただけにも関わらず「旭川は私が引き受ける」という返事を書いた。そして牧水を官舎に招いて泊ませ、軍務の間を縫って町の有力者や歌人、俳人を回って牧水の短冊、色紙の注文をとった。「演習よりしんどいよ」と汗を拭き拭きの大奮闘である。

瀧は思いやりのある温かい人柄であった。部下を可愛がり原稿料が少しでも入るとよく

連れて洋食を食べに行った。

霧華さく秀群はにほへしののめのめあかりはいまだ森に徹らず

路の葉に折々落つる大粒の雫の音は雨にまぎれず
(層雲峡開発)

第七師団から熊本第六師団の旅団長になってから暫くした昭和三(一九二八)年四月、中国大陸へ出兵命令が下った。済南事件である。中国の統一を図ろうとする南軍の蒋介石と北軍の張宗昌とが争い両軍の板ばさみになった在留日本人が危険に晒され保護するたためであった。ところがこの最中、日本に政変が起き、出兵を強行させた田中義一内閣から絶対反対を唱えた民政党の浜口雄幸内閣になり、しかも中国政府が「日本の行動は行き過ぎ」と国際連盟に訴えたため、戦争の指揮をとった軍幹部に責任を全部負わせるという方法で解決、瀧は現役の第一線から退かされた。憤懣やるかたない瀧、部下の青年将校の不満も高まり爆発寸前であった。

南軍が八千円に買ふといふ八千円のが生命かも

戦は人間の事か大明湖の青葦叢になけるよしきり

齋藤 瀏



旭川を訪れた若山牧水夫妻（前列左の2人）と瀏（前列右）一家。後列はキク（左）と史。（1926年）

済南事件で責任をとられ予備役になった瀏は東京・渋谷の小さな借家で鬱々とした日を送っていた。そんな瀏を慰める歓迎会が田端の料亭で行われた。川田順、吉植庄亮、尾山篤二郎、村野次郎、太田水穂、前川佐美雄、宇都野研、石樽千亦らが顔を出した。

任をへて剣をすてたる將軍の大禿あたま夏の月照る
 太田水穂
 燈に照らふ柱に寄れる禿あたまいづれば
 あやめと引きぞわづらふ 川田 順
 將軍のあたまが何とおおきけれこよひ
 はわれは夢に見るべし 前川佐美雄

専ら瀏の禿げ頭が酒の香にされた。渋谷の家は交通の便がよく、瀏の人柄に魅せられて多くの歌人たちが遊びに来て、さながら歌人のサロンのようであった。

二・二六事件で連座して下獄

旭川の官舎で娘の史と遊び友達であった栗原、坂井は立派な将校になって瀏の家へよく来るようになった。栗原は、いつも農村の貧困は政治が腐敗しているからだ、政党、財閥、特権階級を激しく糾弾、天皇親政による国家改造を訴えていた。事件に名を連ねて刑死した将校たちもみな遊びに来た。彼らの純一で正義感に溢れ、国を憂うその至情に心打たれる瀏であった。

昭和十一（一九三六）年二月二十六日、忠報国に燃える青年将校たちはついに蹶起、内大臣齋藤実ら重臣閣僚を襲撃、これにより三重臣が銃弾に倒れた。栗原から「おじさんすみやかに出馬して軍上層部に折衝、事後收拾に努力して下さい」という電話を受けた瀏は古い軍服を着て首相官邸に駆けつけ、その足で陸軍大臣の川島義之大将を訪ねた。だが、すべてが無駄になり蹶起の青年将校らは反徒として、弁護人なし、非公開の暗黒裁判によ

って銃殺刑を言い渡されたのである。一方、瀏は叛乱を利す——として禁固五年、金鶏勲章など一切を剥奪されて豊多摩刑務所に収容、四百五十号と呼ばれる獄衣の身となった。

青年将校の死刑執行の近い日、瀏の監房に小さい紙片が投げ込まれた。
 「お世話になりました。ほがらかに行きませす」

「おわかれです。おじさんに最後のお礼を申します。史さん、おばさんによろしく。クリコ」
 と書かれた栗原からのものだった。保存することも、捨てることも出来ず、口に含んで目を閉じた。処刑の日、悲痛な思いで監房で銃声を聞いていた。瀏は屈辱の日々を歌に詠み自らを慰めた。

床にうつるわが影法師を動かしつつ牢
 の夜更けをひとり遊ぶも
 鉛筆の折れたる芯を掴みつつ牢内に書
 く名歌鑑賞
 夕早も膝に沁みくる冷えきびし坐りく
 づれて短き服よ

歌人協会解散で憎まれ役



晩年の瀧（右）。長野市北石堂の家で史と。(1952年)

出所した瀧にとって歌が唯一の生きる支えになった。昭和十四（一九三九）年四月、師佐佐木信綱の了解を得て主宰誌「短歌人」を創刊した。一番、協力してくれたのは木下立安である。旅行会社の社長で六十歳過ぎてから作歌をはじめたが、瀧の清廉潔白人柄にすっかり惚れ込んで齋藤家のためにも親身になって尽くした人であった。主要同人は小宮良太郎、山川柳子と娘の齋藤史ら。瀧は「短歌人」に心血を注ぐ毎日だった。

日中戦争は拡大し泥沼化の様相を呈し、さらに勃発したアメリカとの戦争は熾烈となり言論統制も厳しくなった。瀧は偶然、思想的

にマークされていた歌人の名のある場所を目にし「これは大変だ」と親しい太田水穂、吉植庄亮に相談、大日本歌人協会の解散を呼びかけた。昭和十五（一九四〇）年十月二十七日、ついに協会は解散された。歌壇史の汚点と言われるこの事件は、果たして時局便乗であったか、真に歌人を救うための苦肉の策であったか。のちに「短歌新聞」の柳田新太郎との対談で「元凶は僕だよ。太田、吉植には何にも罪などない」と責任を一人で負う発言をしている。

後日「歌人って正直すぎて芝居気も解らないねえ」史にボソリと言った。歌人から逮捕者を出したくない、その一念が理解されなかったためだろう。自分こそバカ正直で風当たりにも、いつも素手で立って、損ばかりするくせに……芝居気があっても凡そ上手に立ち回りでできないくせに……と史は複雑な思いであった。

おかしな人生送る

アメリカのB29の空襲が激しくなり東京は至るところが焦土と化した。終戦間近の昭和二十（一九四五）年三月末、一家は瀧の故郷の長野県へ疎開、史一家とは別に池田町に住

んだ。軍人であったころの覇気はまったくなく、たまに遊びに来る孫娘に目を細めて喜ぶ好々爺になっていた。「短歌人」は小宮良太郎に譲ってから若手が台頭、右寄りと見られている瀧の影響を消そうという空気が強くなっていた。瀧の作歌意欲も衰えが目立ち、寂寥相を深める歌が多くなり、モダンズムの娘の史とは対照的であった。七十歳になり史一家と長野で暮らすようになったときは、やっと歩いて寝床に移る衰弱ぶり、戦争が終わって、もう自分の時代は過ぎ去ったという寂しい翳を漂わせていた。

戦やぶれころいたみて住むわれに
 えてするどし雪山の峰
 既にして失はれゆく湖なれば一期の澄
 みを湛へたるかも
 夕映に華やぎ顕ちてありしかば暮れて
 所在の暗き湖

昭和二十七（一九五二）年、最後の歌集『慟哭』を出版したが翌年の七月、娘の史に手をとられ、静かに目を閉じた。歌集五冊、散文集十七冊を残し時代に翻弄された七十四歳の波乱の生涯であった。

（やまな・やすらう「花林」代表）